

東京都小平市における在宅で介護する家族・親族の様相 —市の介護者調査・高齢者クラブ調査から考える—

森山 千賀子 (介護福祉学 地域ケア)

1. はじめに

東京都小平市（以下、小平市）では、第5期介護保険事業計画策定のための基礎資料として、2011（平成23）年度に「高齢者の生活状況や支援サービスの利用意向調査」¹を実施した。その際の「介護保険サービス利用状況実態調査」のなかに、在宅で介護する家族・親族介護者（以下、家族介護者）を対象にした質問項目を盛り込んだ。その意図には、第4期介護保険事業計画時の調査においても調査票の記入者の半数が家族であったことから、在宅で介護する家族・親族の状態やニーズの一端を把握することができる。また、質問項目があることにより、調査票の回収率が少しでもあがるのではないかと考えた。

小平市の総人口は2013（平成25）年4月1日現在185,218人である。高齢化率が21%を越え超高齢社会の自治体となり、2016（平成28）年以降は、後期高齢者の割合が多くなっていくと推計されている（表1・表2）。

本稿では、上記の介護保険サービス利用実態調査のなかの家族介護者への調査結果を再検討し、別途に2011（平成23）年2月に小平市高齢者クラブの方々にご協力頂いたアンケート調査の結果から得られた関連事項を参照しながら、そこから見てきた小平市における家族介護者の様相と介護者支援の視点からこれからの課題を考察したので、ここに報告する。

表1 小平市の人口及び高齢化の推移と推計

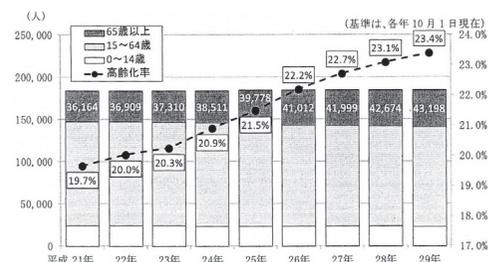
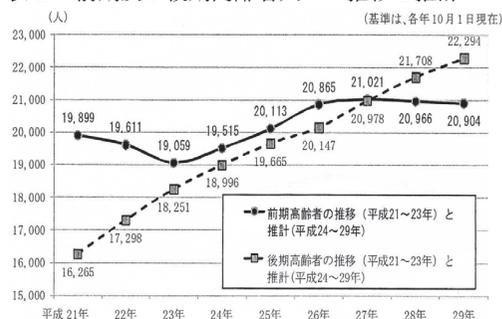


表2 前期及び後期高齢者人口の推移と推計



※ 平成22年～23年の住民基本台帳及び外国人人口を基にしたコーホート法による。

出所『小平市高齢者保健福祉計画 小平市介護保険事業計画（平成24年度～26年度）』平成24年3月小平市P.6・7

2. 介護保険サービス利用状況実態調査による家族介護者へのアンケート

1) アンケートの概要

本稿で取り上げる介護保険サービス利用状況実態調査は、2010（平成22）年12月1日時点において、要支援・要介護認定を受けている方（施設入所者を含む）5,696人の中から、2,900人を抽出（抽出率50.9%）して行われたものである。調査期間は2011（平成23）年1月7日～1月

報告

31日であり、配布・回収ともに郵送法によるものである。回収数は1,884、有効回収数は1,879、有効回収率は64.8%である。そのうち調査票の記入者は、家族が1,059人(56.4%)、宛名本人(666人、35.4%)、無回答(68人、3.6%)、その他(48人、2.6%)、ホームヘルパー・保健師(22人、1.2%)、ケアマネジャー(16人、0.9%)の順であった。

この調査の質問項目は39項目にわたっている。そのうちの7項目(問8～14)が在宅での家族や介護者への質問項目であり、問8は世帯構成、問9は日中独居・夜間独居の有無についてである。家族介護者を対象にしたものは5項目(問10～14)あり、有効回収数1,879のうち1,565が家族介護者であった。家族介護者への質問項目は、①在宅で主に介護している方、②家族介護者の性別、③家族介護者の年齢、④家族介護者が困っていること、⑤必要な介護者支援である。

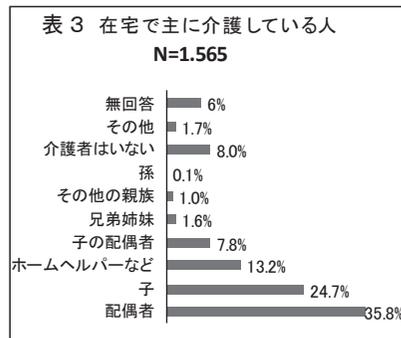
以下、5項目の結果を中心に、そこから見えてきた家族介護者に状況について検討する²⁾。

2) アンケート結果からみえてきたこと

①在宅で主に介護している方—普段の介護者

普段、主に介護している方は、配偶者が35.8%

で最も多く、次いで子が24.7%、ホームヘルパーなどが13.2%、子の配偶者が7.8%であった(表3)。



普段の介護者を世帯構成別にみると、ひとり暮らしでは、ホームヘルパーなどが164人(41.5%)で一番多く、次いで子は75人(19.0%)になっている。子に加え配偶者・兄弟姉妹・子・子の配偶者・他の親族を合わせると105人(26.6%)である。これは家族・親族介護の観点からみると、日常的に通いで介護を行っている「通い家族・親族介護」が全体の1/4以上いると考えられる(表4)。

表4 家族介護者と世帯構成

		配偶者	子	ホームヘルパーなど	子の配偶者	兄弟姉妹	その他の親族	孫	介護者はいない	その他	無回答	総数
上段：人数		561	387	206	122	25	15	1	125	26	97	1565
下段：構成比		35.8%	24.7%	13.2%	7.8%	1.6%	1.0%	0.1%	8.0%	1.7%	6%	100%
世帯構成	ひとり暮らし	2	75	164	19	7	2	0	85	9	32	395
		0.5%	19.0%	41.5%	4.8%	1.8%	0.5%	0.0%	21.5%	2.3%	8.1%	100%
	夫婦二人暮らし (配偶者65歳以上)	371	8	15	3	0	0	0	17	6	20	440
		84.3%	1.8%	3.4%	0.7%	0.0%	0.0%	0.0%	3.9%	1.4%	4.5%	100%
	夫婦二人暮らし (配偶者65歳未満)	33	0	0	1	0	0	0	1	0	1	36
		91.7%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%	2.8%	100%
	その他の家族が同居 (全員65歳以上)	4	54	7	12	12	4	0	4	1	4	102
	3.9%	52.9%	6.9%	11.8%	11.8%	3.90%	0%	3.90%	1.00%	3.90%	100%	
その他の家族が同居 (65歳未満の方も同居)	149	243	19	86	5	8	1	15	10	21	557	
	26.8%	43.6%	3.4%	15.4%	0.9%	1.4%	0.2%	2.7%	1.8%	3.8%	100%	
無回答	2	7	1	1	1	1	0	3	0	19	35	
	5.7%	20.0%	2.9%	2.9%	2.9%	2.9%	0.0%	8.6%	0.0%	54.3%	100%	

②家族介護者の性別

家族介護者の性別では、男性26.2%、女性70.7%であり、無回答は3.1%であった（表5）。被介護者（ご本人）の性別との関係では、男性を介護している配偶者は63.5%であり、女性を介護している配偶者は19.0%であった。また、女性を介護しているのは子34.4%が一番が多い。全体では子の配偶者が介護している割合は7.8%であることから、子のなかには息子である男性介護者も少なからず存在しているのではないかと推

測する（表6）。

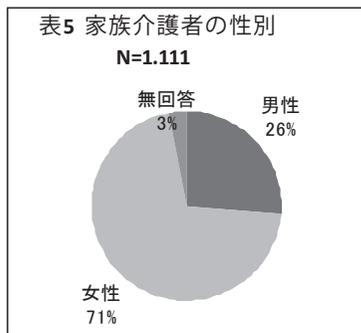
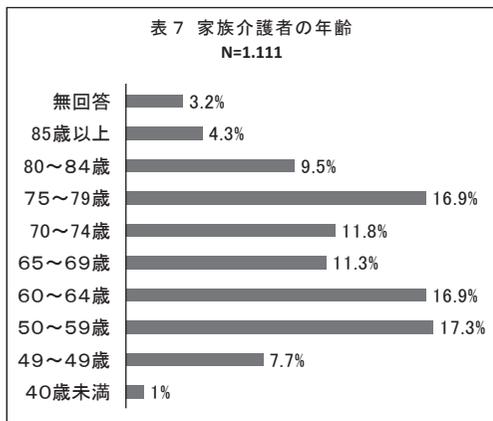


表6 家族介護者 本人（要介護者）性別

上段：人数 下段：構成比		配偶者	子	ホームヘルパーなど	子の配偶者	兄弟姉妹	その他の親族	孫	介護者はいない	その他	無回答	総数
世帯構成	全体	561	25	387	122	1	15	206	125	26	97	1565
		35.8%	1.6%	24.7%	7.8%	0.1%	1.0%	13.2%	8.0%	1.7%	6.2%	100%
	男性	371	9	54	22	0	4	58	27	6	33	584
		63.5%	1.5%	9.2%	3.8%	0.0%	0.7%	9.9%	4.6%	1.0%	5.7%	100%
女性	184	15	333	99	1	11	148	97	20	59	967	
	19.0%	1.6%	34.4%	10.2%	0.1%	1.1%	15.3%	10.0%	2.1%	6.1%	100%	
無回答	6	1	0	1	0	0	0	1	0	5	14	
	42.9%	7.1%	0.0%	7.1%	0.0%	0.0%	0.0%	7.1%	0.0%	35.7%	100%	

③家族介護者の年齢

年齢では、50～59歳が17.3%と最も多く、次いで60～64歳と75～79歳が16.9%、70～74歳は11.8%、65～69歳が11.3%である。全体としては、65歳以上が5割、そのうちの3割が75歳以上になっており、老々介護が進展している様相がうかがえる（表7）。



一方、40～64歳までの累計は41.9%である。子の配偶者より子の方が普段の家族介護者である割合が多いことを鑑みると、働き盛りの子世代が介護役割を担っている側面が多くあることが推測される。

④家族介護者が困っていること

家族介護者が困っていることは、介護者自身の健康に不安があるが51.4%で最も多く、次いで、緊急時の対応に不安があるが45.2%であり、男女別でも一番二番の順であった。

男女別では、女性は、精神的につらいが42.7%、代わりに頼める人がいないが38.9%、体力的につらいが38.3%で高い傾向にあった。男性は、介護サービスが不足している13.4%、自宅で医療的ケアが受けられないが11.7%であり、困っていることの内容に違いがみられた。また、その他は割合としては5%程度であるが、実数で

は男性 12 人、女性 40 人である。誌面の関係上属性別の表を割愛したが、女性の場合 40 人の内の 20 人が子による回答であった。本調査の設問にはない困りごとはあること示されていると考える（表 8・9）。

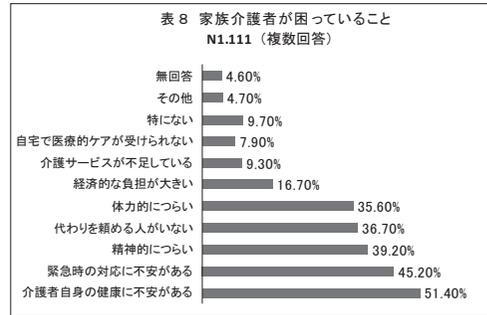


表 9 男女別の困っていること

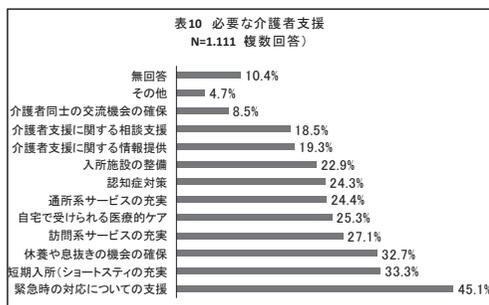
総数=1,111（複数回答）

上段：人数 下段：構成比	介護者自身の健康に不安がある	緊急時の対応に不安がある	精神的につらい	代わりを頼める人がいない	体力的につらい	経済的な負担が大きい	介護サービスが不足している	自宅で医療的ケアが受けられない	特にな	その他	無回答
男性	145 49.8%	135 46.4%	96 33.0%	95 32.6%	88 30.2%	49 16.8%	39 13.4%	34 11.7%	31 10.7%	12 4.1%	11 3.8%
女性	416 52.9%	359 45.7%	332 42.2%	306 38.9%	301 38.3%	311 16.9%	63 8.0%	52 6.6%	74 9.4%	40 5.1%	27 3.4%

⑤必要な介護者支援

必要な介護者支援は、緊急時の対応についての支援が 45.1%と最も多く、次いでショートステイの充実が 33.3%、休養や息抜きの機会の確保が 32.7%、訪問系サービスの充実が 27.1%であった。

上記の家族介護者が困っていることとの関連で、介護者自身の健康への不安や代わりに頼める人がいないなどの割合が高いことの鑑みると、介護を要する人に何かがあった時の対応ではなく、家族介護者に何かがあった時の緊急時の対応や支援が必要とされているのではないかと考える（表 10）。



3. 小平市高齢者クラブ調査

1) アンケートの概要

小平市高齢者クラブ連合会にご協力を頂いた高齢者の日常生活に関する意識調査は、2012年2月～3月の期間に行われた。月1回開催される会長会のお借りして、加入している33団体に10部ずつのアンケート用紙と返信用封筒を配布し、主旨説明を行った。さらに、各会の会長が会員に説明し、協力者各自に回答して頂き投函して頂く方法を用いた。配布数330のうち回収数275、有効回数数は267（65.1%）であった。

本調査の主な質問項目は、①日常生活活動の程度、②現在の精神状態、③社会的関係・社会活動、④家族との関係、⑤今、感じているあなた自身について、⑥一般事項（回答者の属性）である。なお、この調査は日本と韓国の高齢者の日常生活に関する意識を比較することを目的として行ったものであり、家族介護者を扱ったものではない³。しかし、一般事項の整理のなかで、小平市のこれからの状況が示唆できる内容が見受けられたため、本稿では参考データとして紹介する。

2) 小平市高齢者クラブの調査における世帯構成の内訳

表 11 高齢者クラブの調査による世帯構成の内訳

世帯構成	65-74歳		75-84歳		85歳以上		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
1人	16	15.2%	32	23.2%	8	33.3%	56	21.0%
夫婦	60	57.1%	62	44.9%	7	29.2%	129	48.3%
1人と未婚の子ども	4	3.8%	10	7.20%	2	8.30%	16	5.79%
夫婦と未婚の子ども	10	9.5%	3	2.20%	0	0.00%	13	4.70%
1人と息子の家族	5	4.8%	11	8.00%	4	16.60%	20	7.49%
1人と娘の家族	2	1.9%	14	10.10%	2	8.30%	18	6.74%
夫婦と息子家族	2	1.9%	2	1.40%	1	4.20%	5	1.87%
夫婦と娘家族	0	0.0%	1	0.70%	0	0.00%	1	0.37%
1人とその他	5	4.8%	2	1.40%	0	0.00%	7	2.62%
夫婦とその他	1	1.0%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.37%
1人と未婚の子ども・その他	0	0.0%	1	0.70%	0	0.00%	1	0.37%
計	105	100%	138	100%	24	100%	267	100%

表 11 は、横軸を 65～74 歳、75 歳～84 歳、85 歳以上に区分し、縦軸に世帯構成を表したものである。年齢区分別の実数は、65～74 歳が 105 人 (39.3%)、75 歳～84 歳が 138 人 (51.7%)、85 歳以上が 24 人 (9%) である。世帯構成では、夫婦世帯が 129 人 (48.3%) で一番多く、次いで 1 人世帯が 56 人 (20.97%) であり、約 7 割が高齢者のみ世帯である。また 1 人と未婚の子ども、夫婦と未婚の子ども世帯が、全体に 1 割を越えており、日中は高齢者のみの世帯であることが推測される。

平成 24 年度版の高齢者白書には、要介護者と同居している主な介護者の年齢は、男性では 64.9%、女性では 61.0% が 60 歳以上であり、いわゆる「老々介護」のケースが増えている。また、家族の介護や看護を理由に離職や転職をする人たちも増えており、男性は 50 代及び 60 代、女性は 40 代及び 50 代の離職・転職がそれぞれ約 6 割を占めている⁴と記されている。つまり、小平市の現状は全国的な様相とも重なり合う部分が多く、本調査によっても課題として再認識されたと考えられる。

4. これからの課題—家族介護者支援の視点から

二つの調査から、小平市は老々介護のケースが年々と増え、これまでの女性が家族介護を担うという考えではなく、男性介護者も増えていくこと

が予測される。また、働き盛りの子世代が家族介護者であることも現実的な様相であろう。以下、家族介護者支援の視点から現実的な様相に対する課題を三点に絞り述べてみる。

1) ひとり暮らし世帯と家族介護者の課題

前述の高齢者白書に掲載されている調査結果では、子どもとの同居は減少しているが、配偶者や子どもが心の支えになっている人は多く、「配偶者あるいはパートナー」が 65.3%、子どもをあげる人は 57.4% であった⁵。表 4 では、ひとり暮らしの場合には、ホームヘルパーなどの社会的サービスに担い手が普段の介護者になっているが、現実的には家族や親族が何らかのサポートをして生活が成り立っていることが多いのではないだろうか。その頻度や程度は各々の家族によって異なるであろうが、通い家族・親族介護に関しては家族介護者の枠から外されがちである。ひとり暮らし世帯が増えている今日において、家族介護者のとらえ方も変化しているのではないかと考える。

2) 中高年の未婚子ども世代と家族介護

未婚の子どもと高齢者世帯の世帯構成は、高齢者クラブの調査結果では 1 割を越えていた。前述の高齢者白書の調査結果にもあるように、働き盛りの子世代の離職や転職が増えている現実のなかで、家族による高齢者虐待の加害者は息子が最多の 4 割を越えており、このことは 2006 (平成

18) 年の厚生労働省の調査以来変わらない。特に未婚の子どもの場合、離職し親の介護役割を一人で担うことも多く、環境の変化や閉塞感は介護関係の質の低下を招くおそれもある。加えて、親亡き後は単身世帯による孤立化も懸念される。介護者支援の取り組みは、この先の超高齢社会における予防福祉、介護予防としても重要な施策ではないだろうか。

3) 老々介護を支える地域のつながりづくり

小平市高齢者クラブ調査は、6割以上が75歳以上の後期高齢者と呼ばれる方々からの回答である。しかし、日々何らかの形で地域とつながっているせいか、調査結果でも比較的活動的な人が多いと感じられた。また、家族に対して何らかの介護や支援をしながらも、前向きに高齢者クラブに参加している会員がいることも、高齢者クラブの活動を通して知ることができた。つまり、人や組織とつながることが自らの安心感や活力になっていると考えられ、1人の他者の周囲には幾つもの資源があること、家族介護者である前に、1人の人間として他者を支え合うしくみづくりが、老々介護を支える地域づくりにつながるのではないかと考える。

4. おわりに

筆者は2013(平成25)年1月に、小平市男女協働参画推進実行委員会の企画「女と男の参画講座」において、「家族の介護をどうするその1 介護する家族も支えよう」というテーマでお話しをさせて頂ける機会を得た。介護者の現状から、介護者を孤立させず介護者を支えることの大切さを知り、家族、親族、ヘルパー、専門家、地域の人、みんなで介護すること、その方法を探り、学び、つくって行きたいと思っている。

本稿は十分な分析には至っていないが、小平市の現状の一端が少しでも垣間見ることができたらなら幸いである。

【注】

- ¹ 本調査は、高齢者生活状況アンケートと介護保険サービス利用状況実態調査からなるものである。
- ² 本質問項目の結果は、『小平市高齢者生活状況アンケート 介護保険サービス利用状況実態調査報告書』(平成23年3月)の68～78頁に掲載されているものである。本稿ではこの報告書を活用し、本稿の表現方法にあうように言葉などを一部変更して記させて頂いた。
- ³ 本調査は、白梅学園大学・短期大学教育福祉研究センター客員研究員(2012年度)の李美蘭氏との共同研究によるものである。調査結果の報告要旨は、本研究年報の35～37頁に研究報告として掲載している。
- ⁴ 『平成24年度版高齢者白書』 図1-2-3-17, 図1-2-1-18 35～36頁参照
- ⁵ 『平成24年度版高齢者白書』 図1-2-1-5 25～27頁参照